

『観無量寿経』の清浄業処について

並 川 孝 儀

〔1〕「清浄業処」に関する諸見解

『観経』の成立に関してはインド撰述、中国撰述、中央アジア撰述とさまざまな見解が存在しているが、その中インド撰述の論拠の一つとして「清浄業処」という用語が取り上げられる。しかし、その解釈には相違があり、未だ定説を見るにいたっていないのが現状である。そこで、本小論ではこの論点に絞り考察を加えることとするが、それにはまず先学の見解と論拠を眺める必要がある。

最初に「清浄業処」の注目して、この用語と『観経』の成立を論じられたのは、早島鏡正博士であろう。早島博士は「浄土教はこのような業処観を基底として、凡夫の身体の不浄 (asubha) とは正反対の仏身の清浄 (parisuddhi) を業処とする観法を説いた。つまり、仏身や浄土の清浄相を観想の対象とする観法を初めて説いたところに、インド仏教としての浄土教の特色があった。『観経』は、その点でまさしく、清浄業処観を取り扱った経と言えよう。」とし、更に「清浄業処観は、業処をインド仏教のそれのごとく有相のものとしつつ、しかも、浄土教的に無相の仏身・仏土を観察せしめるということを内容としている。これを要するに、『観経』に示された清浄業処観は、インド仏教一般にとく禅定の業処観を、浄土教の見仏・見土に適用したものであり、それは仏随念の展開上にあるものである。」と論じられる¹⁾。ここには、パーリ仏教で説く禅定の対象やその観法の方法を指す業処と結び付けて『観経』の清浄業処観を捉え、それによって『観経』の成立をインド撰述とする考え方が見られる。この見解を支持されたのが平川彰博士である。平川博士は『解脱道論』、『善見律毘婆沙』の漢訳パーリ論書と『俱舍論』、『成実論』、『舍利弗阿毘曇論』などの北伝文献において用語と思想の面から精査し「『観無量寿経』は、業処の観法がよく実習されて

1) 早島鏡正「浄土教の清浄業処観について」『干潟博士古稀記念論文集』(1964), pp. 240-248

いた地方で述作されたものと考えねばならない。」と結論づけ、そして「しかるにここで問題になるのは、『観無量寿経』が中国に翻訳せられた「宋の嘉平年」の頃には、業処観は中国に知られていなかったことである。」と指摘し、「もしこのように中国に「業処」の敎理が伝わらなかったとしたら、中国で四五〇年ごろまでに『観無量寿経』が述作されたということは考えられないことである。同様にこれを、中央アジア成立と見ることも、当時、業処の敎理が中央アジアに存在したことを証明することが必要であるとする。しかしそのようなことは、恐らく不可能であろう。したがって『観無量寿経』は、インド成立にして、曇良耶舎によって、四五〇年ごろに漢訳されたという伝統説を承認してよいと考える。」と論述される²⁾。

一方、藤田宏達博士は早島、平川両博士の見解に対して次のように反論される³⁾。「『観経』の「業処」がパーリ仏敎独特の術語である *kammaṭṭhāna* の訳語であると決定する保証がどこにもないということである。南伝アビダルマの「業処」という術語や敎理は、北伝アビダルマ文献やその他の漢訳経論の中にはまったく見当たらないし、また『観経』でも南伝アビダルマの所説に言及して、その中で「業処」という語を用いているわけではないから、これをパーリ仏敎の術語と同義に見ることは極めて困難である。まして、これをもって、『観経』がパーリ仏敎の業処の観法が行なわれている地方、つまりインド方面で成立したと見るのは、まったく理解に苦しむを得ない。」と指摘して、「やはり清浄な業によって実現した処、すなわち浄土をさすを見るべきであり、この語によってインド成立の復権を主張することは無理といわねばならない。」と自説を述べられる。藤田博士の見解は、要するに『観経』の「業処」が早島、平川両博士が論拠とするようにパーリ仏敎独特の術語である *kammaṭṭhāna* の訳語であると決定できるものではなく、そのような根拠に基づく見解自体問題であるとする。

筆者も藤田博士の見解に賛成であるが、この点をよりはっきりと指摘すれば次の如く言うであろう。即ち、禪定の対象やそれによる観法を意味するパーリ仏敎の用語「業処」は、漢訳文献においてこの用法で用いられている例は存在せず、結局のと

2) 平川彰「観経の成立と清浄業処観」『東洋の思想と宗教』創刊号 (1984) pp. 1-18, 同「浄土思想の成立」『講座・大乗仏教 5—浄土思想』(春秋社) (1985) pp. 41-45, 48-49. 平川博士は後者の論文で、『観無量寿経』は般舟三昧にもとづいて中国で撰述されたものと指摘された藤田博士の論文(「浄土敎における神秘思想の一断面—『観無量寿経』にあらわれた見仏—」『インド古典研究 VI』(成田山新勝寺) (1984) を極めて注目すべき研究としつつも、清浄業処観が言及されていないことを指摘されている。

3) 藤田宏達『観無量寿経講義』(真宗大谷派安居講本) (1985) pp. 29-33, 同「浄土經典の種々相」『講座・大乗仏教 5—浄土思想』(春秋社) (1985) p. 75

ころこの「業処」という用語は kammaṭṭhāna の日本語訳に過ぎないとする可能性が大きいということである。故に、日本語訳としての「業処」を『観經』の漢訳語「業処」と比較すること自体合理でないと考えることは当然のことである。このような理解は古く、既に『望月佛教大辞典 2』（初版 昭和8年12月）の「業処」の項目を見れば、その事情がよく判る。そこで、「業処」は「梵語 karma-sthāna の訳。巴梨語 kamma-ṭṭhāna. 西藏語 las-kyi gnas-pa. 業の止住する処の意味。又行処とも名づく。禪定を成就する方法にして、即ち十徧処等に就き觀想を凝らすを云う。」とし、続けて『観無量寿經』の「清浄業処」の用例や『解脱道論』分別行処品の用例などを挙げる。このように「業処」は觀法を指すパーリ仏教の用語と規定され、それが『観經』の「業処」と何の疑念も示されないまま同一視されていることが判る。それは、むしろ『観經』の「業処」の方が前提となって、kammaṭṭhāna を同定したのではないかと窺える⁴⁾。織田得能『佛教大辞典』には「(清浄) 業処」の項目は見られないから、恐らく『望月佛教大辞典』が最初であろう。この理解はこれ以降続くことになる⁵⁾が、実は早島、平川両博士の見解の根拠は、このような事情が前提となっていると推測されるのである。

このように、早島、平川両博士の見解の前提に問題があることが判ったが、しかしながら他方で、そうであるからといって『観經』の「業処」が禪定修習の対象や觀法それ自体を意味しないということが言えるのかどうかは、また別の問題といえよう。前提に問題があるからといって、その論の過程や結論までのすべてが認められないかは再検討する必要がある。そこで、本小論では先学の諸説を踏まえつつも、新たに『観經』における「清浄業処」の意味を考えたい。この考察は、『観經』に説かれる関連用語などの用例に絞り、そこから「清浄業処」の意味を探ることを目的とするものである。

〔2〕「清浄業処」の用例とその検討

先ず、「清浄業処」がどのように用いられているのか、その文を眺める。

「唯願世尊為レ我廣説下無レ憂惱一処上。我當ニ往生一。不レ樂ニ閻浮提濁惡世一也。此

4) 業処の項目の末尾に川上貞信氏と長井真琴氏の業処と行処に関する論稿が紹介されているが、筆者は未見である。

5) 例えば、『南伝大藏經』第六十二卷 清浄道論（水野弘元訳）（初版 昭和12年10月）。因に、p. 196（註21）において、「業処（kammaṭṭhāna）禪定修習の対象」と記されている。

濁悪処，地獄餓鬼畜生盈満，多不善聚。願我未来不聞惡声，不見惡人。今向世尊五體投地。求哀懺悔。唯願佛日教我觀於清浄業处。」

(大正蔵12巻341b)

「ただ世尊にお願いしたいのは、私のために憂いと悩みのない場所についてくまなくお説きいただくことです。私は是非〔そこに〕往生したいと思うのです。閻浮堤の濁り汚れた世界を願わないのです。この濁り汚れたところは、地獄・餓鬼・畜生で満ちており、不善のものたちがたくさんおります。どうか私が未来世には悪い音声を聞かなくてすみませうに、悪人を見なくてすみませうに。今、世尊に向かって体ごと地に投げ出して、哀れみを求めて悔い改めます。どうか太陽のような仏よ、私に清浄業处をお見せください、と」

さて、この「清浄業处」の意味は、『観経』における業の用例とその文脈から判断すれば、どのように理解すべきであろうか。今ここで、先学の訳を眺めてみたい。

岩波訳は「清らかな行ないのある世界」⁶⁾とし、森訳は「清浄な行ないが営まれている場所」⁷⁾と、末木訳は「清浄な行為によって実現した世界」⁸⁾、龍谷大学本は‘a place where one can be born by performing pure and undefiled acts’⁹⁾と訳している。尚、龍谷大学本には四種の解釈が可能としてその四訳が挙げられている¹⁰⁾。即ち、

- 1) the place where one can born by performing pure and undefiled acts.
- 2) the place which was established by Amida Buddha's pure and undefiled acts.
- 3) the place wherein all acts are pure.
- 4) the pure *kammatthāna*, i.e. the pure object of meditation.

の四種の解釈である。岩波訳と森訳はこの3)に、末木訳は2)に該当するようである。4)の解釈は、「業处」を所謂禅定の対象として理解した立場を示すものであり、1)～3)とは根本的に異なる理解である。この相違が『観経』の成立問題に大きく関わった論点である。

6) 中村元，早島鏡正，紀野一義訳註『浄土三部経（下）』（岩波書店）p. 14

7) 森三樹三郎訳『大乘仏典 6 浄土三部経』（中央公論社）p. 178

8) 末木文美士「観無量寿経―観仏と往生」，末木文美士・梶山雄一『浄土仏教の思想 二』（講談社）p. 46。尚、この訳は、藤田博士の解釈に従ったものである。末木文美士「『観無量寿経』研究」『東洋文化研究所紀要』第百一冊 p. 167。

9) “The Sūtra of Contemplation on the Buddha of Immeasurable Life as Expounded by Śākyamuni Buddha” Ryukoku University 1984 p. 17

10) 同上 p. 17 脚注。

そこで、『観経』の成立に関する重要な論点の一つとされているこの「清浄業処」の意味に限定して、以下において検討してみたい。その検討は、四点より考察したい。

(1) 「清浄業」と「浄業」の用法

ここでは、『観経』に見られる「業」の用例を眺め、そこから「清浄業」の意味を考えてみたい。『観経』には「浄業」について次のような説明がなされる。

「汝今知不。阿彌陀佛去レ此不レ遠。汝當_下繫_レ念諦觀_中彼国_上浄業成者。我今為_レ汝廣説_二衆譬_一。亦令_下未来世一切凡夫欲_レ修_二浄業_一者得_上生_二西方極樂国土_一。欲_レ生_二彼国_一者、當_レ修_二三福_一。一者孝_二養父母_一、奉_二事師長_一、慈心不_レ殺、修_二十善業_一。二者受_二持三歸_一、具_二足衆戒_一、不_レ犯_二威儀_一。三者發_二菩提心_一、深信_二因果_一、読_二誦大乘_一、勸_二進行者_一。如_レ此三事名為_二浄業_一。佛告_二韋提希_一。汝今知不。此三種業過去現在未来、三世諸佛浄業正因。」(341c)

ここには、世尊が未来のすべての凡夫で清浄な行いを修めようとする者を西方極樂国土に生まれることができるようにしようとし、その生まれたい者は次の三福を修めなければならない、と韋提希に告げる。その三福とは、

- (1) 父母に孝養し、師や年長者に仕え、慈しみの心をもって生き物を殺さず、十善業を修めること、
- (2) 三歸依を保ち、諸々の戒を具え、日常の正しい所作を乱さないこと、
- (3) 菩提心を発し、因果の道理を深く信じ、大乘の經典を読誦し、同じ仏道を行ずる者を励ますこと、

である。この三福を行ずることが「浄業」と説かれるが、これは未来に西方極樂国土に生まれることができるようにと願う者が修めるべき行いと説かれている。

ここで、この「浄業」や「清浄業」の解釈について少し吟味してみたい。上述したように、三福を行ずることが「浄業」と説かれ、それは未来に西方極樂国土に生まれることができるようにと願う者が修めるべき行いとされる。この「浄業」という語は、また「浄業成者」(341c)や「浄業正因」(341c)、「清浄業」(341c)として表現されている。「浄業成者」に関しては、「汝當_下繫_レ念諦觀_中彼国_上浄業成者。」という中で用いられ、これを岩波訳は「あなたは思念を集中して、はっきりとあの仏国土を觀想しなさい。それによって清らかな行ないができるようになる。」¹¹⁾とし、森訳は「お前は心をかけて、あの仏国土で清浄な行ないを完成したものたちを、とくに見るがよ

11) 中村元、早島鏡正、紀野一義訳註前掲書 p. 15

い。」¹²⁾と、そして末木訳は「あなたは心をつなぎとめて、清浄な行為によって成就したその世界をつまびらかに観想しなさい。」¹³⁾とする。これらの訳には微妙な解釈の相違が見られる。即ち、岩波訳は「浄業成者」の主体者は未だ仏国土にいない人々を指すのに対して、森訳は仏国土で清浄な行ないを完成したものたちと捉え、末木訳は仏国土を浄らかな行為によってなったもの¹⁴⁾と解して主体者を凡夫とは見ていないようである。森訳と末木訳は共に主体者を凡夫としていないことに共通しているが、しかし「浄業」の解釈に関して言えば、岩波訳と末木訳での仏国土へ至るための行為とする解釈と、森訳での仏国土における行為という二つの立場のあることが判る。また、岩波訳は思念を集中して仏国土を観想すれば、清浄な行ないを完成できると、「繫念」を「浄業」の条件と見なしているのに対し、森訳と末木訳はそのようには理解していない点が相違している。この相違は、二分する「清浄業処」の見解を見事に呈している。

次に、「浄業正因」について考える。この語は「此三種業過去現在未来、三世諸佛浄業正因。」の中で用いられるが、これを岩波訳は「この三種の行ないは、過去・未来・現在、三世の仏たちの行なわれた清らかな行ないそのものなのだ。」¹⁵⁾と、森訳は「この三種の行ないこそ、過去・未来・現在の三世にわたってあらわれた諸仏が、その清らかな修行の唯一の根本とされたものである。」¹⁶⁾、そして末木訳は「この三種の行為こそ、過去・現在・未来の三世の仏たちの正しい原因となる清浄な行為である。」¹⁷⁾と、三者共に「浄業」は三世の仏たちが行なってきた清らかな行為として解釈され、これは三福そのものの意味として用いられている例である。

次に、「清浄業」の用法について考える。

「如来今者、為_下未来世一切衆生為_下煩惱賊之所_下害者_上、説_下清浄業_上。(中略)如来今者、教_下韋提希及未来世一切衆生觀_中於西方極樂世界_上。以_下佛力_上故、當_下得_レ見_二彼清浄国土_一、如_下兩執_二明鏡_一、自見_乙面像_甲。見_二彼国土極妙樂事_一、心歡喜故、應_レ時即得_二無生法忍_一。」(341c)

と、ここでの「清浄業」は、未来世のすべての衆生に西方の極樂世界をよく観させ、かの国土の極めて類のない安樂のさまを見ると、心が歡喜するから、直ちに無生法忍

12) 森三樹三郎訳前掲書 p. 181

13) 末木文美士前掲書 p. 74

14) 同上 p. 31

15) 中村元、早島鏡正、紀野一義訳註前掲書 p. 16

16) 森三樹三郎訳前掲書 p. 182

17) 末木文美士前掲書 p. 75

を得るであろうというように、観法それ自体の行為を指しているようである。この用法は、上で述べた「浄業」のそれとは異なったものである。

これらの例を眺めて、『観経』における「浄業」と「清浄業」の用法について私見を述べてみることにする。この序分で用いられている「浄業」と一例ではあるが「清浄業」とが、異なった用法であることが判明した。三福として説かれる「浄業」は、その意味を明確に説いているのであるから、この意味をもってこの用語を理解することとは全く問題はない。そして、「清浄業」の用例も観法それ自体の行ないを意味していると見なしてよいであろう。「浄業」と「清浄業」という用語が明確に区別されて用いられているのであれば、「清浄業処」の意味はこの「清浄業」の用例に従えばよいことになる。しかし、その理解が正しいかどうかは疑問である。漢字の数の制約から「清浄業」が「浄業」とされたと理解することもできるからである。だから、「清浄業処」は必ずしも「清浄業」の意味からでしか解釈できないとは言えないのである¹⁸⁾。

このように考えると、「清浄業処」は、「浄業」の意味からすれば、「清浄な行いの処」ではなく、「清浄な行いによって得られる処」と解釈するのが妥当であろう。これは、龍谷大学本で言えば、1) に該当する解釈である。一方、「清浄業」の意味からは「観法の行なわれる処」や「観法を行うための処」というように解釈できよう。

因に、『観経』に見られるこれら以外の「業」の用例を眺めると、「十善業」(341c)、「不善業」(346a)、「悪業」(342c)、「(345c) 2 例」(346a) 2 例 (3 例)、「業障」(344a)、「(346b) が見られるが、いずれも行為という意味でしか用いられていないことが判る¹⁹⁾。

(2) 「処」の用法

ここでは、「清浄業処」の「処」の意味を『観経』に見られる他の用例から眺め、考えてみたい。上で見たように、先学の訳は「世界」や「場所」とされているが、今一度この点を吟味する。

『観経』において「処」という語は、「清浄業処」の他に「無憂悩処」、「此濁悪処」

18) 浄業と清浄業に関して「浄業が三福などの行業について言われ、最後の清浄業が観仏について言われているずれはある」と指摘されている。末本文美士前掲論文「『観無量寿経』研究」p. 167。ほぼ同様の指摘は同前掲書 pp. 97-98 でもなされている。

19) 業に関しては、福原亮蔵『浄土教の業思想』(教育新潮社) pp. 25-32、水尾現誠「『観無量寿経』における業思想」雲井昭善編『業思想研究』(平楽寺書店) 1980、pp. 603-618 などがある。特に、後者は浄業や清浄業の用法について詳しく論じられている。

と「繫念一処」の三箇所で見られる。前二者の用例は、

「為_レ我廣説_下無_二憂悩_一處_上。我當_二往生_一。不_レ樂_二閻浮提濁惡世_一也。此濁惡處，地獄餓鬼畜生盈滿，多_二不善聚_一。願我未來不_レ聞_二惡声_一，不_レ見_二惡人_一。今向_二世尊_一五體投_レ地。求_レ哀懺悔。唯願佛日教_二我觀_二於清浄業處_一。」(341b)

との如く、「清浄業處」と対句のような形で説かれている。「無憂悩處」は「憂いと苦悩のないところ」、「此濁惡處」は「この世の濁り汚れたところ」と解釈できるように、ここでの「處」は空間的な世界を意味している。このことから判断すれば、対句的表現とも見られる「清浄業處」の「處」も同様な意味で理解すべきものであろう。この考えに沿えば、この用語は「清浄な行ないによって得られるところ」というように空間的場所と解釈できることになる。

他方、もう一つの「繫念一處」の用例を眺めると、

「汝及衆生，應_下當專_レ心繫_二念一處_一想_中於西方_上。」(341c)

とある。この文が「心を乱さず、念を一箇所に繋ぎ止めて、西方を想うべきでありましょう。」という意味であることから判断すると、「繫念一處」における「處」の意味は、上述の用例のような空間的な世界とは異なり、精神が集中する時の具体的な対象、或いは具体的でなくても何か一点に精神を集中するところを示しているようである²⁰⁾。そして、その目的は西方の極楽世界を想うためになされるものと説かれている。その意味から、ここでの「處」は観法のための精神を集中するところと理解すべきものであろう。先学の訳でも、岩波訳では「心を一筋にし、思念を一處に集中して西方を觀想するのだ。」²¹⁾と、森訳では「一心不乱に一つのことに思いをこらし、西方を觀想するようにつとめるがよろしい。」²²⁾、末木訳では「心を專注し、ただ一つのことに心をつなぎとめ、西方を觀想しなさい。」²³⁾としている。

このように、『觀經』における「處」という語は、単一の用法ではなく、空間的な世界と、精神を集中するための一点という二つの異なった意味をもって用いられていることが判る。

以上、『觀經』に見られる「清浄業」、「浄業」と「處」の用例を眺めてきたが、これらから判断すれば、「清浄業處」は次のような解釈が可能となろう。即ち、前者に關しては、「清浄業」のように觀法の意味をとる場合と、「浄業」のように三福の行な

20) 「處」という語は見られないが、同様の表現として「汝當_下繫_レ念諦觀_中彼國_上浄業成者」(341c)、「智者應_二當繫_レ心諦觀_二無量寿佛_一」(343c)を挙げることができる。

21) 中村元，早鳥鏡正，紀野一義訳註前掲書 p.17

22) 森三樹三郎訳前掲書 p.186

23) 末木文美士前掲書 p.77

いの意味をとる場合がありうる。後者に関しては、一つは「処」の意味を空間的场所とする場合と、他は「処」を精神の集中するところという場合である。これらを組み合わせれば、次のようになるであろう。「清浄業処」を文字通り「清浄業」と「処」の用語で解釈する場合は、「処」の二義性を踏まえて「[どうか私に] 観法を行なうために精神を集中するところ（箇所）[をお見せください。]」、或いは「[どうか私に] 観法の行なわれるところ（場所、世界）[をお見せください。]」と解釈できよう。「浄業」の用法から見れば、「処」を空間的场所とする場合「[どうか私に] 清浄な行ないによって得られるところ（世界、場所）[をお見せください。]」と解釈できるが、「処」を精神の集中するところとした場合、「清浄業」と「処」の関係が不明で、どのように解釈するのか困難である。敢えて、「清浄な行ない」と「精神の集中するところ」とを同格にして結び付けて解釈しても「[どうか私に] 清浄な行ないのある精神を集中するところ[をお見せください。]」のようにしか考えられない。この「精神を集中するところ」が西方の極楽世界を意味し、そこで「清浄な行ない」がなされているということであれば、上の解釈は必ずしも成立しないではない。しかし、この「清浄な行ない」が三福の規定の意味であるとするならば、そこには精神を集中することに関する内容は見られず、また「浄業」の用法が仏国土における清浄な行ないではなく、そこに至るための清浄な行ないを意味しているのであるから、この解釈は無理と言えよう。

上述してきたように、「清浄業処」を考える時、「清浄業」や「浄業」と「処」の用語から検討を加えた理由は、「清浄+業処」という考え方よりも、「清浄業（浄業）+処」の検討の仕方のほうが『観経』における他の用例から見て、無理のない対応であると思えるからである。

結局のところ、「清浄業処」を『観経』の用例から検討した結果、三つの解釈が妥当性をもつであろう。即ち、観法の行ないを意味する「清浄業」と二つの用法を有する「処」の組み合わせによる二つの解釈と、三福のような仏国土に生まれるための清らかな行ないを意味する「浄業」と空間的世界を意味する「処」によって成り立った用語と見る解釈である。これらの中どれが正しいかは、この段階では判断できない。しかし、言えることは、「清浄業処」を「業処」という用語でもって解釈しようとするまでもなく、上述したように『観経』に見られる用語で十分理解できるということである。

(3) 文脈からの考察

次に、文脈を通して「清浄業処」がどのような状況で説かれているのかを眺めて、その意味を探ってみたい。関係する前後の文章の概略を以下に示す。文の構成上①～④に段落分けした。

①「韋提希も夫である頻婆娑羅王と同様に阿闍世によって幽閉され、心は憂いに満ち、やつれはて、遥かなる仏に向かい、目連と阿難とに会わせてほしいと願うと、二人の仏弟子と仏も王宮に現われた。韋提希は仏を目のあたりして号泣して次のように問うた。どのような過去の罪があってこのような悪い子を生んだのか。私のために憂いと悩みのない場所についてお説き下さい。私は是非〔そこに〕往生したいと思うのです。閻浮提の濁り汚れた世界を願わないのです。この濁り汚れたところは、地獄・餓鬼・畜生で満ちており、不善のものたちがたくさんおります。どうか私が未来世には悪い音声を聞かなくてすみすように、悪人を見なくてすみすように。今、世尊に向かって体ごと地に投げ出して、哀れみを求めて悔い改めます。どうか太陽のような仏よ、私に清浄業処をお観せください、と。すると、世尊は眉間から光を放ち、その光は金色に輝き、十方の無量世界を照らした。須弥山のような金色台に変化した。そこに諸仏の清く美しい国土が現われ、ある国土は七宝や、蓮華からなり、また自在の宮殿や、水晶の鏡のようであった。世尊は韋提希にこれを見せたのであった。

②韋提希は、私は極楽世界の阿弥陀仏のみもとに生まれたいと願い、思惟と正受(極楽を思い、つぶさに観察する手だて)を教えてほしいと願う。その時、世尊は口から光を放ち、頻婆娑羅王の頂を照らすと、大王は自然に阿那含の位に達した。世尊は韋提希に、阿弥陀仏はここから遠くないところにおられる。念をかけてかの国土の浄業を完成した者を明瞭に観なさい。そして未来のすべての凡夫で浄業を修めようとする者は西方極楽浄土に生まれることができるようにしよう。そこに生まれたい者は浄業といわれる三福を修めるべきである。この三つの行ないこそ過去、現在、未来の諸仏が行なった浄業であり、それが仏となった因である、と。

③仏は阿難と韋提希に告げた。未来のすべての衆生で煩惱に害される者のために清浄業を説こう。今、韋提希と未来のすべての衆生に西方極楽浄土をよく観させよう。仏の力によってかの清浄な国土を見られるのは、丁度よく映る鏡をとって自らが顔形を見られるようなものである。かの国土の極めて類のない安楽のさまを見ると、心が歓喜するから、直ちに無生法忍を得るであろう、と。

④仏は韋提希に告げた。あなたは凡夫で心の想いが劣っており、天眼を具えていないから遠くをよく観ることができない。別の方法によってあなたに見せてあげましょ

う、と。

その時、韋提希は仏に、私は今仏の力によってかの国土を見ることができましたが、仏滅後には多くの衆生は濁り汚れ、不善となり、五苦に追われることになるが、その時どうすれば阿弥陀仏の極楽世界を見ることができるのでしょうか、と。」（この後、続いて日想の初観の話、即ち定善の内容に入る。）

この筋立ての構成はおおよそ次のようになろう。①憂いに満ちた韋提希が仏に憂いと悩みのない世界に往生することを望み、清浄業処を見せてほしいと願うと、世尊は金色台に変化した諸仏の清く美しい国土を現わし、見せた。②韋提希は極楽世界の阿弥陀仏のみもとに生まれるために思惟と正受を教えてほしいと願うと、世尊は浄業である三福を修めよと説く。③仏は未来のすべての衆生で煩惱に害される者のために清浄業を説くが、それは仏の力によって西方極楽浄土をよく観ることであり、そうすれば無生法忍を得ると言う。④韋提希は今仏の力によってかの国土を見ることができましたが、仏滅後はどうすれば阿弥陀仏の極楽世界を見ることができのかと問うと、世尊は日想観など観法を説き始められる。

この文脈を通して「清浄業処」の意味を考えてみたい。①の中だけで考えると、先ず「清浄業処」は憂いと悩みのない場所（無憂悩処）、閻浮堤の濁り汚れた世界（此濁悪処）と対応する語と見なせる。そして、この用語の「処」はここでは空間的世界を意味し、決して禅定の対象と読み取れない。また、ここでの「清浄業処」が何であるかと言えば、それはこの直後に説かれる須弥山のような金色台に変化して七宝や蓮華からなる水晶の鏡のような諸仏の清く美しい国土を指し示すものと言えよう。③から観法に関する内容に入るが、ここでの「清浄業」の用法は①②での三福の如き清浄な行ないとは異なり、この清浄な行ないは西方極楽浄土をよく観ることを意味する。この点から判断して、①②と③の間には話に大きな展開が見られる。この用法をもって文字通りということで「清浄業処」を解釈すべきかどうかは考慮を必要とする。④で判るように、ここまでは仏の力によって阿弥陀仏の極楽世界を見ることができたという話から、主題は韋提希が仏滅後どのようにしてかの国土を見ることができるといふ問題に変わる。しかし、この前後の話を通して流れる主題は韋提希がいかに阿弥陀仏の極楽世界を見るかである。その意味から見れば、「清浄業処」の「清浄業」は③での用法であり、「処」は極楽世界という空間的世界を意味しているとも理解できる。精神の集中するところを意味する「処」は、次に続く日想観の中でしか見られないことをどのように解すればよいであろうか。

(4) 「観」、「見」、「想」の用法

ここでは、『観経』における「観」、「見」、「想」という動詞に着目し、それらの用法を眺める。その理由は、「唯願佛日教_三我_二觀_一於清浄業_処」(341b)の用例に見られるように、「観」などの意味する動詞の用法が「清浄業_処」を考える上で一つの資料を提供することになると思うからである。

以下において各々の用例を眺める。先ず、正宗分における「観」や「見」、「想」の用例を眺め、その結果を「清浄業_処」が見られる序分で検証し、そこからこの用語の意味を探ろうとするものである。

日想（初観）の全文を以下に示す。

「汝及衆生，應_下當專_レ心繫_二念_一於西方_上。云何作_レ想。凡作_レ想者，一切衆生，自_レ非_二生盲_一，有目之徒，皆見_二日没_一。當_下起_二想念_一正坐西向諦觀_中於日上。令_二心堅住專_レ想不_レ移，見_下日欲_レ没狀如_中懸鼓_上。既見_レ日已，閉_レ目開_レ目，皆令_二明了_一。」(341c-342a)

ここでは、先ず「心を乱さず、念を一箇所につなぎ止めて西方を想う」→「太陽が沈むのを見る」→「想念を起こす」→「西に向かつてはっきりと太陽を観る」→「吊り下げた太鼓のような形の沈みかけた太陽を見る」→「太陽を見終わったら、目を閉じて開いてもはっきりとしておく」というよう順序で説かれているが、これは西方を「想う」ためにどのようにすればよいのかと、それ以下に観法の次第を説いたものである。それによると、太陽という具体的な即物を先ず「見る」ことによってその対象を捉え、その結果その対象を現に見ようと見まいと明了にしておくことが、「想う」ことであるとされる。そこには、現実の対象を必ずしも必要としない認識の在り方が示されている。即ち、具体的な形相によって認識された対象を心の中に現わすことを意味する。このように、「見」と「想」の用法には明確な区別をもって用いられていることが判る。「観る」は、太陽を観るとの如く「見る」との用法に区別を見い出せない。

更に、水想（第二観）や樹想（第四観）における宝樹を観ずる時の文には、次のように説かれる。

「次作_二水想_一。（～）見_二水澄清_一，亦令_三明了無_二分散意_一。既見_レ水已，當_レ起_二水想_一。見_二水映徹_一，作_二瑠璃想_一。此想成已，見_二瑠璃地内外映徹_一。」(342a)

「見_二此樹_一已，亦當_二次第_一，一一觀_レ之。觀_二見樹莖枝葉華果_一，皆令_二分明_一。」

(342b)

この水想では、「水を想う」→「水の澄みきっているさまを見る」→「水を見終わ

ったら、氷を想う」→「氷の透き通るさまを見る」→「瑠璃を想う」→「瑠璃の大地の透き通るさまを見る」という順序で、そして樹想では「この樹を見る」→「これを順次観る」→「樹の茎、枝葉、華、果実を観見する」→「それをはっきりとしておく」というように説かれている。ここでも、観法の説かれ方は、即物的な対象を認識する時に「見」が用いられ、そこから心で対象を捉える時には「想」という語が用いられているようである。「見」と「観」との区別は「観見」とあるように明確ではなく、ここでは用法の違いを得ることはできない。「見」と「観」のこの用法が正宗分における用例すべてに適用できるわけではないが、ほぼこの形式で理解しても差し支えはないであろう。

そこで、この正宗分における「見」や「観」、「想」の用法を考慮に入れながら、同様にして序分におけるこれらの用例を眺める。その際、用例を上述した文の構成①～④に依拠して考えてみたい。

①「世尊威重無_レ由_レ得_レ見。」(341b)

①「願遣_二目連尊者阿難_一，与_レ我相見。」(341b)

①「願我未来，不_レ聞_二惡声_一，不_レ見_二惡人_一。」(341b)

①「有_二如_レ是等無量諸仏国土_一。嚴顯可觀。令_二韋提希見_一。」(341b)

③「如来今者，教_下韋提希及未来世一切衆生觀_中於西方極樂世界_上。」(341c)

③「以_二仏力_一故，當_レ得_レ見_二彼清浄国土_一如_二丙執_二明鏡_一自見_乙面像_甲。見_二彼国土極妙樂事_一，心歎喜故，」(341c)

④「汝是凡夫。心想羸劣，未_レ得_二天眼_一，不_レ能_二遠觀_一。諸仏如来，有_二異方便_一，令_二汝得_レ見。」(341c)

④「以_二仏力_一故，見_二彼国土_一，」若仏滅後，(中略)云何当_レ見_二阿弥陀仏極樂世界_一。」(341c)

①の段落では、「見る」という用例が主に見られるが、そこでの用法は目のあたりに対象を捉えるという意味であり、③の段落でも「見る」という用例は、かの清浄な国土を見ることができるのは丁度よく映る鏡をとって自らが顔形を見ることができるようなものであろう、という文中の比喻で判るように具体的な現にある対象を認識する時に用いられている。このことから判断して、その他の「見る」という用語も同じ意味で解せるであろう。また、西方極樂世界を「観る」という「観る」の用法は、この用例だけでは判断しかねるが、上でみたように「見る」と区別なく使用されていることからすれば、同様の用法と見なせる。④の段落での「見る」をどのように解すべきかは、はっきりとは判らないが、段落①③と用法は同じとするのが妥当であろう。

日想観などの用法から見れば、ここでの「見」も「観」も、目のあたりにできる対象を捉える時に用いられる語と理解できるであろう。また、ここには序分での唯一の「想」の用例が見られる。この用例だけで「想」の意味を確定することは問題であるが、日想観などで用いられた用法と同じと見て差し支えなからう。

ここで、「観_二於清浄業_一」の意味を「観」という動詞の用法からまとめてみたい。「観る」という動詞の用法は、「見」と区別なく具体的な形相を認識することと、上述した文脈上の考察とを併せ判断すると、この「観」は現実的な対象を捉えることを意味していることになる。決して、具体的な形相によって自己の心に現わす「想」ではないのである。このことから、「清浄業_二」は行法としての観法の在り方をその中に含んでいる、即ち観法の具体的対象を意味しているとも解釈できることになる²⁴⁾。ただ、この考察は序分と日想観以降とが同じ条件にあることを前提としている。つまり、この用語の意味を決定できないのは、一つの要因として序分とそれ以降の定善とが元来同一の文献であったのか、どうかという点があげられるかもしれない。つまり、文献の断層による不整合さ²⁵⁾が、このような決定をしにくくしているとも考えられるのである。

〔3〕 まとめ

先ず、上述した『観経』の用語の用法に関してまとめると以下の如くである。

- (1) 「浄業」は、未来に西方極楽国土に生まれることができるようにと願う者が修めるべき行い、即ち三福を行ずることである。「清浄業」は、未来世のすべての衆生に西方の極楽世界をよく観る、観法それ自体の行為を指している。この用法は、「浄業」のそれとは異なったものである。
- (2) 「清浄業_二」は、「清浄+業_二」ではなく、「清浄業（浄業）+_二」と理解すべきである。
- (3) 「_二」という語は、単一の用法ではなく、空間的な世界と、精神を集中するための一点という二つの異なった意味をもって用いられている。

24) 禅観経典から考察した論稿には、大南龍昇「『観無量寿経』の成立と禅観経典」『大正大学研究紀要』80 (1995) pp. 67-97 があり、また禅観窟壁画から観法を論及したものに、宮治昭「トゥルファン・トヨク石窟の禅観窟壁画について—浄土図・浄土観想図・不浄観想図— (上)」『佛教芸術』221号 (1995) pp. 15-41, 同「(中)」『佛教芸術』223号 (1995) pp. 15-36, 同「(下)」『佛教芸術』226号 (1996) pp. 38-83 がある。

25) 『観経』の構成上の問題に関しては、山田明爾「観経攷—無量寿仏と阿弥陀仏—」『龍谷大学論集』第408号 pp. 76-95 に詳しい。

(4) 「観」、「見」、「想」という動詞の用法の中、目のあたりに即物的な対象を認識する時には「見」が用いられ、その具体的な形相によって認識された対象を心の中に現わす時には「想」という語が用いられているようである。「見」と「観」との区別は「観見」とあるように明確ではなく、ここでは用法の違いを得ることはできない。

(5) これらの用法から、「清浄業処」は次のような解釈が可能となろう。即ち、「清浄業処」を文字通り「清浄業」と「処」の用語で解釈する場合は、「処」の二義性を踏まえて「[どうか私に] 観法を行なうために精神を集中するところ（箇所）[をお見せください。]」、或いは「[どうか私に] 観法の行なわれるところ（場所、世界）[をお見せください。]」と解釈できよう。「浄業」の用法から見れば、「処」を空間的場所とする場合「[どうか私に] 清浄な行ないによって得られるところ（世界、場所）[をお見せください。]」と解釈できる。

これらの用法から見れば、次のような指摘が可能となろう。『観経』の「清浄業処」を考える時、早島、平川両博士の見解の前提となっているパーリ仏教の「業処」（禪定の対象）にこだわる必要性はない。その意味と同様の用法は『観経』の用例の中から読み取ることができるからである。故に、藤田博士の指摘の通り、「清浄業処」の用語をもって『観経』のインド撰述の根拠とはなり得ない。しかし一方で、だからと言って「清浄業処」の意味を禪定の対象と解せないという訳でもない。早島、平川両博士の見解とは別に、『観経』の用例から眺めれば、禪定の対象と解釈できる可能性はある。また、「清浄業処」を藤田博士のように「清浄な業によって実現した処、すなわち浄土をさす」と解釈する場合、「観る」ところのその処は目のあたりにできる現実世界なのか、それとも違うものなのか、漠然として明確ではない点も検討を要するであろう。

いずれにしても、『観経』の「清浄業処」はパーリ仏教の所謂「業処」を比較すべき用語と考える必然性はないのである。

